

Isabel の間違った選択とその覚醒

——精神の自由を求めて——

市 川 嘉 章

Henry James は New York 版の序文で、女主人公 Isabel Archer を *The Portrait of a Lady* における「唯一の小さな隅石」¹⁾として位置付けている。そして「自らの運命に敢然と立ち向かう一人の若い婦人の構想」¹⁾が、作品の道具立てとしてまず芽生えたのだと述べている。更に、「主題の中心をこの若い婦人の意識に置くことによって、望みうる程に面白くて美しい一つの難事を達成することが出来る。」²⁾とも説明している。女主人公に比べれば、他の登場人物達は、彼女を取り巻く「衛星 (satellites)」²⁾として取り扱われているに過ぎない。Leon Edel は、*The Portrait of a Lady* の威信が物語の奇妙な要素からではなく、遺産相続人 Isabel の抱く「アメリカ人の夢」と彼女の心を揺るがす覚醒から生まれていると説く。³⁾これを言い換えれば、女主人公における人生の選択と、その過誤から生ずる目覚めの展開が物語の中心になっていると言えよう。

アメリカ娘 Isabel は、人生に対する大きな夢を抱きヨーロッパへ渡り、その夢が実現される状況にありながら、それは無残にも破られてしまう。彼女にもたらされた遺産の故に陰謀の標的となり、結婚の選択をめぐるって惑わされ、大きな過ちを犯したがためである。聡明な彼女がどのようにして判断力を失い失敗したかを、拙論ではまず追跡してみたい。更に物語の後半では、必然的に Isabel に不幸な結婚生活が訪れる。経験を通して、状況に対する彼女の認識は一段と深められてゆくが、自らの生き方に対して最終的にはどのような形で決着をつけるのか、James は暗示するのみで、曖昧のまま物語を終らせている。そのために、結末をめぐるって読者の解釈が分かれてくる。拙論では、この解釈の違いを概観するとともに、Isabel が夫の許に戻ってから後、いかに生きようとするのか、作品全体の流れに沿って推察してみたい。

(1)

1870年代の初め、伯母 Touchett 夫人に連れられて大西洋を渡った Isabel は、旧世界の伝統的な文明に接し、思いきり心豊かに美しく生きて自己の充実を計ろうと念願する。しかし物語の実際の展開は、ユニークで魅力的なこのアメリカ娘に対する三人の男の求婚が主軸になっている。「ヨーロッパの光景が、Isabel の経験する冒険をいかに色どって和らげようとも、その冒険は、彼女が夫を見つけ共に生活しようとする事にあくまで係わっている。」⁴⁾と F. W. Dupee が指摘するように、彼女の観念的な念願は色褪せてしまう。代りに結婚の選択という具体的な問題が表に出てきて物語全体を貫ぬく。

物語の「視点」から見ると、後期の作品 *The Ambassadors* では、Lambert Strether

の目を通し一貫して物語の世界が語られているのに対し、*The Portrait of a Lady* では、Isabel の意識が主として本人によって語られているだけでなく、彼女を観察する目が他にも存在する。すなわち、女主人公の動向を暖かく、そして同時に冷静に観察する脇役の二人が登場する。それは、病身に皮肉屋の従兄 Ralph Touchett と彼女の友人で現代的な女性記者 Henrietta Stackpole である。また更にそれを補う形で、作者 James の説明が加わる。

Isabel は、彼女を追ってヨーロッパへやって来た正直一途のアメリカ人実業家 Caspar Goodwood と、温厚で革新的な政治思想の持主 Warburton 卿、それぞれの求婚を続けざまに拒否する。誇り高い彼女は、これによって或る種の満足感を味わったかもしれないが、Ralph には彼女の将来に対する期待感、Henrietta には不安感をそれぞれ与える結果となる。なお、断られた二人の求婚者は、そのまま物語の舞台から姿を消すことなく最後まで係わりを持ち続ける。これは、James が個々の人物を物語の線上に一例に並べるのではなく、人物相互の関連を最後まで保って、作品の有機的な統一を図っているためである。

二人の求婚を連続して拒否した Isabel のイメージについて、James は序文の中で「やせぎすの、聡明で (intelligent)、誇り高い (presumptuous)」⁵⁾ と述べている。この他、彼女の性質は作品の中で「好奇心の強い (curious)」とも表現されている。Isabel が Warburton 卿の申し込みを拒否した理由を、Ralph が尋ねると、“I too don't wish to marry till I've seen Europe.” (New York Edition, Vol. III, p. 213.)⁶⁾ と答える程である。Isabel には更に「潔癖な (fastidious)」ところがある。友をよく知る Henrietta は彼女に対して、“You're too fastidious; you've too many graceful illusions.” (Vol. III, p. 310.) と警告する。このように見てくると、Ralph が彼女に向かって、“You're the most charming of polygons!” (Vol. III, p. 213.) と評しているように、表面的に見れば、Isabel は様々な特質を示している多面体である。

しかしながら、彼女の結婚への道程を辿ってみると、心の底に潜む一つの根源的な個性の存在に読者は気付かざるを得ない。それは「精神の自由」を求める願いと行動の強靱さに他ならない。これが作品の前半では、結婚の選択の自由に対する確固たる主張となる。彼女は Warburton 卿の申し入れに対し、己れの享受してきた、あるいは享受し得る “the free exploration of life” (Vol. III, p. 155.) を断念することがどうしても出来なかった。Goodwood に対しても、“my personal independence” (Vol. III, p. 228.) をはっきりと主張する。そして Henrietta に対して、幸福とは “A swift carriage, of a dark night, rattling with four horses over roads that one can't see...” (Vol. III, p. 235.) との比喩で答える。Edel は、これを「小説を読み耽る少女の概念」⁷⁾ と述べているが、それだけでは不十分な説明であろう。これは、未来が未知の世界であってこそ、Isabel はフリーハンドで臨むことが出来るのだという信念の表明ではあるまいか。第三者の目には、Warburton 卿も Goodwood も彼女の夫として不適格者には見えない。しかし Isabel 本人にとって、束縛に連なるおそれがある結婚はどうしても受け容れ難かったのではなからうか。

二人の求婚者を退けた後、Isabel が第三の求婚者 Gilbert Osmond の申し込みを、結局は受け容れたのは何故であろうか。Osmond とかつては愛人の関係にあった Merle 夫人によって用意周到に仕掛けられた計略の罠にはまってしまったとも言えよう。Isabel が七万

ポンドの遺産を伯父 Touchett 氏から受けた事を Merle 夫人が知った時、彼女を Osmond と結ばせ、娘の Pansy をも幸せにする計画の実現に、この根なし草のアメリカ女性は全力を尽くす。しかし、Merle 夫人がいかなる深謀遠慮を巡らそうとも、Isabel に正常な判断力と Ralph の忠告を容れる率直さが具わっていたならば、結婚には踏みきらなかったはずである。

Osmond が Isabel に愛の告白をした時、“I’ve neither fortune, nor fame, nor extrinsic advantages of any kind. So I offer nothing..., and some day or other it may give you pleasure.” (Vol. IV, pp. 18-19.) と付け加える。これは Osmond 自身の不利な点を正直に打ち明ける形を取りながら、実はそれを彼の魅力の極め手に変えてしまう巧みさと言えないであろうか。Isabel と違って、観察者の Ralph は Osmond を厳しく評価して止まない。Osmond は人間として器が小さく、狭量で利己的であること、更に彼は趣味の化身であり、そのような不毛の好事家の感受性に気を使うのは Isabel にふさわしくないとまで断言する (Vol. IV, pp. 70-71.)。Ralph は最後に、“I love you, but I love without hope.” (Vol. IV, p. 72.) と自分の本心を打ち明ける。

Ralph の忠告と真情の吐露を無視してまで、自らの選択に彼女がこだわったのは一体何故であろうか。それは Osmond との結婚こそが、精神の自由を与えてくれると信じたが故ではなかろうか。Warburton 卿の財産、爵位、名誉、屋敷、土地、地位、名声、等々凡てが Osmond に欠けていることこそ、Isabel にとって喜びだと彼女は Ralph に告げる (Vol. IV, p. 74.)。遺産によって、この貧乏なディレッタントの生活を援助することが出来ること、そして何よりも、洗練された審美の世界を Osmond と共に生きることは、精神の自由とその喜びをもたらしてくれるとの直感的な信念が働いたのである。しかしこれは余りにも純粋で、現実の醜さを知らぬ無邪気さと言わざるを得ない。この無邪気な思い込みが、彼女の聡明さにかげりをもたらしたのである。

ところが皮肉なことに、狭量で気難しい Osmond は、彼女の精神的な自由の希求には、つとに気付いてはいたがあえて無視しようとした。結婚前 Isabel が余りにも沢山の、しかも「よくない考え」を抱いていることを「唯一の欠点」であると認めたのは、他ならぬ Osmond である。“*Dame, if they must be sacrificed!*” (they=her ideas, Vol. III, p. 412.) と彼は Merle 夫人に打ち明けている。Isabel が夫の真の人間性を次第に感知するのは、結婚生活を送ってしばらく経ってからであり、己れの悲劇に対する覚醒はそこから生まれたのである。ある夜遅く明け方近くまで、彼女はローマの自宅の客間で、結婚以来過ごしてきた日々の生活を振り返り瞑想に耽る。“He had really meant it—he would have liked her to have nothing of her own but her pretty appearance.” (Vol. IV, pp. 194-195.) と内省を深め、夫が彼女に何を求め、何を求めていなかったかを悟る。この覚醒によって彼女の幻滅と不幸は、はっきりとその姿を現わす。

Edel は、Isabel と Osmond を対比させて、「彼等の違いにもかかわらず、この二人は同じコインの両面であり、エゴティズムの二つの習作である。」⁸⁾ と述べている。これは、エゴティズム (自負心) という観点からの指摘であるが、結婚を契機として両者の自我が、互に反発したことは容易に想像することが出来る。希望とは裏腹に、Isabel は精神の自由を享受出来ない結果となる。しかしエゴティズム以上に、両者の関係に破綻をもたらしたのは、

人間性の相違ではあるまいか。James 自身はこれを、「高潔な性格と偏狭な性格の明白な対立」⁹⁾と呼んでいる。それは、Merle 夫人と手を組んで遺産の分け前にあずかろうとする陰謀の実行者と、それを何一つ知らずに結婚した無垢な犠牲者の違いである。換言すれば、両者の倫理観 (morality) の相違こそ、対立の根源的な原因ではなからうか。

(2)

James は、この作品の最初の部分は行動が不足しているが、Isabel の結婚によって展開される後半の部分は、十分に劇的であると *The Notebooks* の中で述べている。¹⁰⁾ たしかに後半では作者が言う如く、Isabel が陰謀の犠牲になってしまったとの自覚が急テンポで深まる。そこで、後半の劇的な動きと彼女の覚醒の相互関係を探求してみたい。

Edward Rosier なるアメリカ青年が、1876年ローマに登場して Osmond の娘 Pansy に求婚する。しかし Osmond は、僅かな年取しかない Rosier と娘との結婚には強く反対する。丁度その頃、Warburton 卿が再び登場し、Pansy に対して気持を動かす。彼は革新的な政治家として名声を博しているが、いまだ独身であり、又病身の Ralph と友情の絆で強く結ばれている。Osmond は Pansy と Warburton 卿の結婚に対しては、極めて積極的な態度をとり、Isabel に向かい Warburton 卿と娘との結びつきの実現に尽力するよう求める。Merle 夫人も Osmond と共にこの計画を画策していることが彼女に解ってくる。

Fred B. Millett は、小説の前半が Isabel の夫選びに係わる話であり、後半の重要な焦点の一つは、彼女の義理の娘 Pansy の夫選びに Osmond 夫妻が関わっている仕組みであるとして、次の指摘をする。「James は前半と後半の間に、奇妙で効果的な相似の関係を作り上げている。」¹¹⁾ Isabel が Osmond と Merle 夫人の慫慂で、かつての求婚者と義理の娘との結婚成就に努力しようとするれば、それは彼女の心に複雑な感情を生まざるを得ない。同時にそれは、Osmond と自らの結婚を巧みに成立させた背後の存在を彼女に意識させる一つの契機にもなっている。事実、前にも引用した自宅の客間での瞑想は、数日前に目撃した Osmond と Merle 夫人の親しげな光景が再び現われる所で終わっている (Vol. IV, p. 205.)。この光景は、両者のかつての関係と彼女に対する陰謀を暗示するだけでなく、Pansy と Warburton 卿に対するこれからの策謀をも彼女に示唆したはずである。これは覚醒の目が大きく開かれた出発点と言えよう。しかしながら彼女の覚醒には、陰謀の証拠とも言うべき裏付けはない。この段階では、それは鋭敏な感覚によって生まれた彼女の推察に過ぎない。

やがて Warburton 卿は、Pansy を妻に迎えたいと Isabel に打ち明けるが、彼の真意は不幸な自分の近くに居たいことではなからうかとの推論を彼女は抱くに至る。Rosier に対する Pansy の思い入れを確かめた Isabel は、当然 Warburton 卿に対して冷たい態度を示す。突然彼が帰国することになったのは、Isabel の厳しい姿勢からその苦しい心情を察知した結果に他ならない。Pansy に惹かれながらも、心底では不幸な Isabel の近くに居たい Warburton 卿の気持を作者は、「微妙で扱いにくい問題 (ticklish business)」¹²⁾と表現する。

Merle 夫人は、Warburton 卿の断念をどうしても諦めきれず、執拗に彼と娘の橋渡しを

Isabel に求める。Merle 夫人の狙いに彼女は今やはっきりと目覚めると同時に、Osmond と自分との結婚にも同じような策略が背後に働いたにちがいないとの疑惑を一段と強く持つ。かつての尊敬の念が、今ではすっかり色褪せ、“Poor, poor Madame Merle!” (Vol. IV, p. 331.) という詠嘆の気持に変わっている。読者から見れば、これは策謀の誘いに対する Isabel の拒否と、夫人のよこしまな心に対する憐憫の表明に他ならない。Pansy が Osmond と Merle 夫人の間に生まれた子供だとの秘密が、Osmond の妹 Gemini 伯爵夫人を通して Isabel に伝えられ、陰謀はその具体的な姿を現わす。

やがて Isabel は、Osmond の強い反対の意向にもかかわらず、ローマからイギリスへ渡り死の床にある Ralph と、今は際の別れを果たそうとの決断をする。倫理意識と自由意志の結合が、彼女をそのように駆り立てたのである。イギリスへの出発に先立ち、修道院へ送られた Pansy に暇を告げにやって来た Isabel と、そこに待ち構える Merle 夫人の間に最後の対決が起こる。ここで Merle 夫人は、七万ポンドの遺産が実は Ralph から出ていたのだとの彼女の推断を伝える。そこには、Isabel と Osmond の仲を裂く意図が隠されている。Merle 夫人の情報提供に対し、Isabel は皮肉の念を込め、“I believed it was you I had to thank!” (Vol. IV, p. 389.) と報復するのであるが、Merle 夫人はこれに対して、“You’re very unhappy, I know. But I’m more so.” (Ibid.) と応酬してアメリカへ立ち去る。この捨てぜりふ程、利己的で良心の痛み欠けている言葉は他にない。Isabel は Gardencourt の邸宅で、Ralph との今生の別れを果たすが、この時自分に与えられた遺産の出所について Merle 夫人の推測が本当であったことを直接確かめる。更に臨終の場における彼の言葉と相まって、彼女の覚醒は完結する。

Ralph は、彼女が本当は幸せでないとの告白に初めて接し、不思議な満足感を覚えて次のように述べる。“You wanted to look at life for yourself—but you were not allowed; you were punished for your wish. You were ground in the very mill of the conventional!” (Vol. IV, p. 415.) この言葉を Edel は、Isabel にとって、「耳の痛い裁断・極め付け (uncomfortable verdict)」¹³⁾であると表現する。これは Ralph の観察者としての冷静な側面の現われである。彼は同時に、“I don’t believe that such a generous mistake as yours can hurt you for more than a little.” (Vol. IV, p. 417) と従妹を心から慰めてもいる。これは Isabel に対して兄妹のような愛情を示す言葉に他ならない。このように Ralph は、互に相反する (ambivalent) 気持を抱きながら女主人公に接してきたのである。死の床にあった Ralph の口から厳しい裁断の言葉を聞いた Isabel は、将来の生き方についてどのように模索をしたか、次に考察してみたい。

(3)

Isabel が Goodwood の激しい抱擁をきっぱりと拒否してローマの Osmond の許へ戻った後、彼女はいかなる生き方をするのか、James は具体的には一切説明していない。彼は *The Notebooks* の中で、女主人公の最後の状況まで見届けなかったことについて、曖昧な言い訳をしている。すなわち、「いかなる事も全部が語られることは決してない。読者は、まとまった事を受け取ることが出来るだけだ。」¹⁴⁾と述べて、作品におけるまとまり・統一の

重要性を強調している。読者が知りたい将来の具体的な選択について、一切述べられていないのは何故であろうか。

これより前、Isabel の覚醒が始まった頃、Henrietta は親友から不幸な結婚を打ち明けられて、もしそうならば何故 Osmond と別れないのかと訊く。それに対し Isabel は、“But I can't publish my mistake. I don't think that's decent.” (Vol. IV, p. 284.) と答える。Henrietta が、“You're too proud.” (Ibid.) と言う如く、Isabel は確かに誇り高い女性である。しかし彼女の誇りは、世間体・評判を重んずる虚栄心 (vanity) ではない。彼女の言う「高潔な (decent)」とは、他人の目に映る自分の姿ではなく、自己の目に映る自分の姿に対する純粋な願いではあるまいか。従って、“It's not of him that I'm considerate—it's of myself!” (Vol. IV, p. 285.) と Henrietta に答えているように、彼女の気持はあくまで自分に向けられ、己れの高潔さを大切にしようとする。そしてこのことは、彼女の精神と行動の軌跡からも容易に理解することが出来る。

それ故に、彼女の決めた選択が間違いだと悟った時、“One must accept one's deeds.” (Vol. IV, p. 284.) と述べて自己に対する責任から逃れることはしない。そして彼女は、将来に向かって積極的に生きる姿勢を崩すこともしない。Ralph の臨終の場に駆けつける旅の途中、Isabel はこれからの生き方にも思いを馳せる。断念への希求よりも深く、将来の年月を生きることこそ、自らの務めであるとの意欲が湧き起こってくる (Vol. IV, p. 392.)。精神の自由を求める彼女の願いは、不幸な経験にもめげず、消えることがない。

このように James は、Isabel の責任の受け容れと積極的な生き方を示しながら、結末ではなぜか具体的な収束の説明を省略している。そのため、結末について二つの異なる評価が生まれている。Joseph Warren Beach に代表される考え方では、彼女が最後に夫の許に戻ることは、苦しい選択ではあるが、あり得ることだとしている。Beach は、「(夫婦という) 一つの関係に対する貞節、又は誠実さの徳」¹⁵⁾が女主人公によって守られているとの立場を取る。これは、彼女の誇りが現状の維持に向かったのだという常識的な解釈である。

これに対して Pelham Edgar は、Isabel の夫選びで、又その結果を受け容れる決意において、頑なに自己の意志を押し通す特質が彼女にあると認めた上で、「それでもなお、結末の瑕は残る。」¹⁶⁾と述べて、次のような批判を展開する。「一つの豊かな性格が発展するのを見たいという読者の欲求は裏切られる。そして失われた望みの代りに、苦難を通して彼女が、力を回復するのを目撃することを我々は許されない。」¹⁶⁾ このように読者の願いが満たされない結末を、Edgar は “abortive ending”¹⁷⁾と呼ぶ。彼はむしろ、読者に力強く訴える感動的な場面として、Isabel と Ralph の最後の別れの方を高く評価する。¹⁸⁾

拙論では、Isabel の人間性を解明しながら、作品全体の流れに沿って、ローマへ戻った後の選ぶべき道について推論を進めることにする。しかしその前に、Isabel の原型としての作者自身の特質について考察してみたい。Herbert Read は Henry James 論の中で、ピューリタニズムの世界で自意識に目覚め、続いて地中海ヨーロッパの感覚的な世界に投げ込まれたことによって、James の二重性 (dualism) が生まれたと述べている。¹⁹⁾ 更に Read は、彼の二重性の特質を次のように説明する。「従順な、あるいは独断的な精神の持主であったならば早々に決めてしまい、どちらか一方の世界に留まり、変わることはなかったであろう。しかし James は、識別する精神を具えていた。彼は両世界の価値に敏感であり、又

これらの価値は矛盾するという事実を知っていた。]¹⁹⁾ 彼にあっては、両世界での体験によって、相反する価値観及びそれぞれの精神風土へのこだわりがずっと持続していたのである。

女主人公 Isabel は、作者 James が自らの姿をかなりの程度投影して作られたものであるとの指摘は、Edel によって次のようになされている。まず彼は、女主人公が若くして亡くなった作者の従妹 Minny Temple の面影を彷彿とさせるものとした上で、²⁰⁾ 「Henry が Isabel をヨーロッパへ送って遺産相続者にする時、彼は自分の場合とかなり似ている苦境 (predicament) に彼女を据える。」²⁰⁾と述べている。Read の指摘する James の二重性が、Isabel の性格に色濃く投影されていると考えることは決して無理ではあるまい。Osmond の許へ向かわせるという状況に Isabel を置いた時、識別する精神の持主 James が、自己を映す鏡として彼女の苦境を描いたと考えること、又は Edel の言う「自分自身についての個人的な譬え話 (fable)」²¹⁾をしたのだと見なすことは、自然ではなからうか。

Isabel の客間での長い瞑想を叙述する中で、“She was not a daughter of the Puritans, but for all that she believed in such a thing as chastity and even as decency.” (Vol. IV, p. 200.) という文がある。作品の中で、彼女の倫理観がこのようにはっきり表現されている所は少ない。しかしヨーロッパ体験の足跡を辿ってみると、自己の自由な選択がもたらした結果について責任を取ろうとする毅然たる態度は明確に貫ぬかれている。これに対して、自分を陥れた陰謀に対する気持は、作品の中では抑制され、あまり顕在化していない。しかし、心の中には Osmond に対する批判の精神が燃え続けていたはずである。もし Isabel が陰謀から生まれた Osmond との生活を追認し、曖昧のまま恩讎を越えて、元の鞘に収まるとしたら、それは彼女の倫理観と矛盾してしまうのではなからうか。

Isabel は一方において、結婚を破綻させてはならぬ責任を負うと共に、他方では夫婦の間に虚偽の存在を受け容れることが出来ないはずである。James がもしこのディレンマを意識していなかったら、物語を Isabel と Ralph の最後の会話で終わらせていたにちがいない。作者は Henrietta に、“But this morning she started for Rome.” (Vol. IV, p. 437.) とさりげなく言わせている。これを推測すれば、Isabel が Osmond との決着を求めて、話し合いのため又は対決のためローマへ向かったのだと解釈出来ないであろうか。両者の話し合い又は対決が、決裂に終ってそれぞれ別の人生を歩むようになるか、あるいは和解へ転ずるのか、それとも第三の道が開けるのかは予断を許さない。ここで第三の道とは、両者が名目だけの夫婦関係を続けること、すなわち形の上ではそれを維持しながら、実質的には Isabel が独立して、別居の生活を始めることを意味する。

ここで更に推論をおし進めるならば、Isabel はこの第三の道を採用の可能性が一番大きいのではなからうか。何故ならば、結婚のしきたりを守り、同時に世俗との妥協を排して彼女の倫理意識を貫ぬこうとすれば、選択の幅は狭められ第三の道へと収斂してしまうからである。そして何よりも、彼女の伯母である Touchett 夫人の個性的で自由な（夫から全く独立した）生活は、Isabel に独りで生きる励ましと指針を与えてくれるのではなからうか。夫 Osmond との関係は、雅量のある Touchett 氏と伯母の場合とは全く異なっている。しかし、夫から完全に独立した Lydia Touchett における生き方の知恵を、彼女はごく身近で学んだはずである。Merle 夫人がアメリカへ去った後、Isabel が陰謀の真相を問い質すことの出来る人物は夫 Osmond しか居ない。従って、Osmond との決着がつけられないま

まの曖昧な夫婦関係は、希望のない暗黒の生活に他ならない。Isabel が人生の苦難に耐えて生きるには、その先に希望の光が認められねばならない。それ故、夫との決着こそが避けては通れない関門である。一方、気難しい Osmond にとっても、一番同意しやすいのは、上記の第三の道ではなからうか。

(4)

The Portrait of a Lady は、いつ頃のヨーロッパを背景として書かれたのであろうか。作品の中で一箇所だけ具体的な年代が示されて、読者に手掛かりを与えている。すなわち、Rosier が Pansy との結婚に尽力してほしいと Merle 夫人に頼んだのが、1876年の秋となっている(Vol. IV, p. 89.)。Isabel はこの時点より二年前、すでに生後六箇月の男の子を病気で失なっている(Vol. IV, p. 96.)、Osmond との結婚は多分それより四年前程、すなわち1872年頃となる。

作品の舞台となったイギリス、フランス、そしてイタリアの諸国は、当時王制のもと、あるいは共和制のもと、市民階級による社会支配の時期を迎えていた。そして芸術の分野では、ブルジョア文化の花を咲かせていた。James は三十二歳の時、初めて祖国脱出の意図を抱いてヨーロッパへ渡った。1875年の晩秋から約一年間パリに滞在し、その間 Ivan Turgenev や Gustave Flaubert 等の文人と交わりを持った。Turgenev からは、特に小説技法について大きな影響を受けたと言われている。1876年末より彼はロンドンに移り住み、その後イタリアへの旅行を試みたりしている。そして James が経験したこの時期は、作品の中に設定された Isabel の選択と覚醒の年代とおおむね一致している。

これは偶然の一致かもしれない。しかしこの作品では、作者の経験が Isabel の肖像作成にかなり微妙に反映されていると言えないであらうか。James は自分の生きた時代、場所を背景に、一人のアメリカ女性の肖像を丹念に仕上げた。Edel は、小説の世界の大いなる画廊に飾られたこの肖像が、十九世紀ヨーロッパ小説の女主人公達に堂々と伍して、その独自性を保持していると述べ、²²⁾ 次のように要約する。「Isabel のドラマは抑制された情熱のドラマであり、その情熱は高潔な理念に変えられ、世俗の世界の厳しい現実を物ともしない力を求める欲求に駆り立てられている。」²²⁾ これは、Isabel の精神に対する最大級の賛辞であるが、拙論では彼女の肖像(人間像)の特質を客観的に評価してみたい。

まず、旧世界に接しその凡てを理解して、自己の充実を計ろうとする当初の積極的な意欲は、観念的であり、又気まぐれであったと言わざるを得ない。そのため Isabel には、探求すべき方向性の拡散、欠如が生まれてしまう。この点について Ralph は、彼女を“so many-sided”(Vol. III, p. 213.) と評している。友人 Henrietta は、アメリカ人として又 *The Interviewer* 誌の記者としての確かな視点から、ヨーロッパ文明に対峙してそれを観察し批判している。これに対して、Isabel の姿勢はヨーロッパを受け容れるのに忙しく、いささか受身の弱さを示していると言わざるを得ない。Isabel のこの資質は、Osmond の自らは何も生み出さないディレッタントの不毛性と、ある程度共通しているのではなからうか。

更に、「女性の独立」という視点から Isabel と Henrietta を比べると、具体的な自分の仕事を持っている Henrietta には、Isabel 以上の強い独立性が具わっている。この点、

Isabel は独立心に富んでいるものの、それを保障するのは彼女に与えられた遺産のみである。Isabel の旧世界に懸けた夢は、結果的には結婚の選択に終始して、しかもそれがみじめな失敗に終わってしまう。結婚によって運命が大きく左右された時に、彼女の独立性は揺らぐ。これに対し、時代の先駆者 Henrietta は特に結婚の夢を追求したわけではなかったが、Bantling 氏というよき伴侶を得て幸せな結婚が約束される。両者のこの対照は、まことに皮肉な結末ではなからうか。

女性の独立という点で Henrietta に見劣りする彼女であるが、それを補ってなお余りある魅力を Isabel の肖像が具えているのに、読者は気付かざるを得ない。ヨーロッパへやって来たこの無邪気なアメリカ娘は、精神の自由を求めたが、人生の選択に過ちをおかしてそれに目覚める。陰謀の犠牲となって苦しみに耐え、それを克服して成長を遂げてゆくさまが読者に示される。失敗はしたが敗北はしない Isabel の人間的な魅力を、James は微細にそして豊かに描いている。しからばこの人間的な魅力は、どこから生まれてくるのであろうか。我々は、ここで再び James がこだわり続けた二重性の世界へと戻らねばならない。すなわち、作者の考え方を投影する Isabel も亦、新旧両世界に対する厳しい識別の精神を保ち続けたればこそ、彼女は新しい経験を通して、人間として高められ美しく成長したのである。

(注)

- 1) Henry James, Preface to *The Portrait of a Lady*, New York Edition (New York: Charles Scribner's, 1908) Vol. III, p. xii.
- 2) Ibid., p. xv.
- 3) Leon Edel, Introduction to *The Portrait of a Lady*, The Bodley Head Henry James (London: The Bodley Head, 1968) Vol. V, p. 7.
- 4) F. W. Dupee, *Henry James* (London: Methuen, 1951) p. 115.
- 5) Henry James, Preface, p. xiii.
- 6) Henry James, *The Portrait of a Lady* からの引用は、以下凡て New York Edition Vol. III又は Vol. IVの頁数で示す。
- 7) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London* (Philadelphia: Lippincott, 1962) p. 424.
- 8) Ibid., p. 426.
- 9) Henry James, *The Complete Notebooks*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers (New York: Oxford Univ. Press, 1987) p. 13.
- 10) Ibid., p. 13.
- 11) Fred B. Millett, Introduction to *The Portrait of a Lady*, Modern Library (New York: Random House, 1951) p. xxiii.
- 12) Henry James, *The Complete Notebooks*, p. 14.
- 13) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, p. 427.
- 14) Henry James, *The Complete Notebooks*, p. 15.
- 15) Joseph Warren Beach, *The Method of Henry James* (Philadelphia: Albert Saifer, 1954)

p. 138.

- 16) Pelham Edgar, *Henry James: Man and Author* (New York: Russell, 1964) p. 251.
- 17) *Ibid.*, p. 252.
- 18) *Ibid.*, pp. 254-255.
- 19) Herbert Read, *Collected Essays in Literary Criticism* (London: Faber, 1938) p. 361.
- 20) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, p. 422.
- 21) Leon Edel, *Henry James: The Treacherous Years* (Philadelphia: Lippincott, 1969) p. 17.
- 22) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, p. 433.

SUMMARY

Isabel's Wrong Choice and her Awakening —In Quest of Freedom of Mind—

Yoshiaki ICHIKAWA

Henry James put Isabel Archer, heroine of *The Portrait of a Lady*, in the position of a "corner stone" in the architectural concept of his novel. Her wrong choice in the matter of her marriage and her awakening in consequence of it is the central theme of the story. A young and charming American girl crosses the Atlantic in pursuit of her dream of living in Europe as abundantly and beautifully as she wished. Her dream, however, ends in disenchantment. Because of a large inheritance from her uncle, she is made the victim of a conspiracy by a pair of expatriate Americans, who have been corrupted morally in the Old World. In the story, three suitors appear before her and she refuses the first two, but accepts the last, Gilbert Osmond, who turns out to be one of the conspirators for her legacy. Though intelligent, she is trapped into agreeing finally to Osmond's courtship.

First in this article, why and how this intelligent girl came to lose her prudence toward Osmond is explicated. Secondly, an inquiry is made into how she was to find out the right way for her to live after her awakening came. Her cousin Ralph Touchett tried to dissuade Isabel from marrying Osmond, a narrow-minded and barren dilettante. But she made her own decision, because she came to believe that union with Osmond would give her "freedom of mind," which she valued most highly. We can see that deep in her heart was a strong quest for freedom of mind. This quest made her refuse the other two suitors, and led her to accept Osmond. Ironically this choice was betrayed by her husband's neglect of her quest, for their basic characters were quite different and opposed.

After her marriage, the conspiracy against her comes gradually to light. It is revealed that Pansy, supposedly Osmond's daughter by his late wife, is in fact the daughter of Osmond and Madame Merle, who is his ex-mistress and who has manipulated the scheme. In spite of her husband's opposition, Isabel goes to see Ralph, who is to die soon. The last interview with him shows to her the fact that the legacy came from Ralph in reality, thus making her awakening complete. At the end of the story, James suggests rather ambiguously that she returns to Osmond. But this does not make clear the possibility of Isabel's true reconciliation with her husband.

From the explication of the text, a supposition can be made most presumably as follows: Isabel could not help maintaining the conventional relation of husband and wife if she thought seriously of her responsibility toward matrimony. On the other hand, however, she could not recognize and allow the present false situation with her husband because of her strict moral sense. Therefore, only a narrow road of choice is considered to be left for her to take: that is, nominally she would keep her relation with her husband, but substantially she would leave him and live an independent life. Through her experience, she changed beautifully from an innocent girl to a spiritually mature lady who never admitted her renunciation in spite of her failure.